

## 武蔵野日曜集会 聖霊降臨節祈禱会

## 聖霊人

――ローマ書第7章24節～8章9節――

1993年5月30日

小池辰雄

十字架・聖霊の愛 神・キリスト・我の一对一の関係 たまわりたる現実 キリストの光で読む  
 言の奥の響き 聖霊人

## 【ローマ7】

24 噫われ悩める人なるかな、此の死の体からだより我を救わん者は誰ぞ。25 我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す、然れば我みずから心にては神の律法につかえ、肉にては罪の法に事つかうるなり。

## 【ローマ8】

1 この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。2 キリスト・イエスに在る生命いのちの御霊みたまの法のりは、なんじを罪と死との法より解放したればなり。3 肉によりて弱くなれる律法おきての成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。4 これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完まっうせられん為なり。5 肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。6 肉の念おもいは死なり。霊の念は生命なり、平安なり。7 肉の念は神に逆う、それは神の律法したがに服わず、否したがうこと能わず、8 また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

## ●十字架・聖霊の愛

人間の交わりは火花の散るような交わりでありたい。アッシジのフランチェスコと女弟子のクララ、どちらも素晴らしい魂です。

今日は聖霊降臨の特別な集会で、もう皆さんは、

「我は聖霊人なり」

と、それだけのことがはつきり言えるようにならなければクリスチャンではない。人間の



在り方はいろいろです。躓いたり転んだりします。けれども、

「私の本質は誰が何と言おうとも聖霊人である」

と、それだけのことをはつきりあなた方は自分の告白として進んでください。

我々の交わりはキリストの直結の人たちの交わりです。私なんていうのはしようのない野郎です。この破れ器をキリストは棄てたまわない。讃美歌に、

「人は棄つれど君は棄てず」

という歌詞がある。皆さん一人一人がそうです。

「神は愛なり」

と言うけれども、

「神は、キリストに在つて、愛なり」

なんです。キリストの愛は十字架・聖霊の愛です。そういう、火の出るような愛です。

「我は火を投ぜんために来たれり……いろいろな分争が起きる。平和ではない

んだ」

とある。非常に烈しい言です。そういう聖霊人が本当に人を助ける、人を荷なう。今日を一つの峠として、我々はいよいよみ霊の力で進んで行きましょう。私は、

「各々が自由にいけ」

と言いました。それは本当にキリストに直結するために、そう言つた。少なくとも、この武蔵野幕屋はそれを貫いていきます。

「私は仆れるまで、どんな事があつてもそれでいきます」

という、み霊における本当の愛をもって貫こうとしないならば、今日限りに止めていただく。そういう聖霊のペンテコステであります。これがキリストが、

「火を投ぜんために来たれり」

と言つた聖言に沿つた私の告白です。

### ●神・キリスト・我の一对一の関係

パウロがローマ書7章の終りの方で、

24 噫われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救わん者は誰ぞ。

と、パウロは本来の自分を「死のからだ」と言いました。

「律法の義については責むべき所なし」

と誇るパウロでしたが、そんなものももう、

「塵芥の如く思う」

と言つた。このローマ書の7章の終りから8章にかけては凄いとこです。

25 我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す、然れば我みずから心にては神の律法につかえ、肉にては罪の法に事うるなり。



我らのではない、我がです。

「我が主イエス・キリストに在りて神に感謝す」

と、複数であったら単数一人称で読みなさい。複数で読んでいるうちはダメです。どこまでも、「神・キリスト・我」の一对一の関係です。複数で読んでいると間がのびてしまう。信交の世界は一对一の関係です。

「此の死の体より我を救わん者は誰ぞ」

と、素晴らしい告白だね。本来の自分は「死のからだ」だと。聖書の文字にこだわらないで、もうひとつ奥を読む。私はそれでなければやり切れない人間なんです、「神・キリスト・我」の一对一の関係が本当に立っていないなら。この性来の弱虫の泣き虫の小池がなぜ、こんなになつたか。

### ●たまわりたる現実

ローマ書8章、

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。」

その通り。我々はみ霊にあつてキリスト・イエスに在る者です。もう罪から完全に解放されている。相対的に自分がどうであろうと、そんなことは問題ではない。根源の現実をたまわっている。根源の現実はたまわりたる現実で——お互いさま滑つたり転んだりする人間ですよ、けれども——この根源現実の自分の自覚というものは、たまわりたる現実、たまわりたる我、たまわりたる無、たまわりたる聖霊です。それをいただいている者が

「キリスト・イエスに在る者」

ということですよ。

「私はまだ在りません」

ではない。絶対恩寵としていただいているんですから。だから、そこに在るんです。この根源現実、ありがたくてしょうがない。皆さん一人一人がダイヤモンドみたいに光っているんだ。

<sup>2</sup>キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放

したればなり。

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法則はなんじを罪と死との法より解放してある」

と。瞑想して祈ることは非常に大事なことです。こういう聖句を読んだら、ジーツと目をつぶって瞑想して、パウロと同じ境地に入る。それでなかったら、本当に読んでいることにはならない。「生命のみ霊の法」というのは、み霊の活ける法と言っても構わない。活きた法則です。活きた法則に従うことが最も霊的な自然なんです。

「自然界は素晴らしい」



なんて言うけれども、自然界は自然の法則に従って、風が吹けば木の葉が揺れる。或る葉が、  
「私は風が吹いても揺れません」

なんていう葉はありはしない。法に従うということが、靈法に従うということが最も自由なことです。靈的世界の自由自然なすがたです。だから、

「なんじを罪と死との法より解放したればなり」

という。「罪と死」というのは、自己本位なこと。自己本位の法則から解き放した。「罪」とは、神・キリストぬぎの自己本位です。普通の人が

「自由、自由」

なんて言っているのはみな罪なんだ。自由とは人を助ける自由、愛の自由なんです。これはマルチン・ルターも『クリスチャンの自由』の最後のところで言っています。

### ●キリストの光で読む

キリストの光で聖書を読んでいると、どこを読んでも楽しい。決して律法ではないですから。新約聖書はキリストの力の、光の、愛の、生命の裏付けによって語られている言です。

「何々すべし」

なんて、キリストが言っているところもある。それは、

「私がさせてやるぞで」

というように読まなければ。何か律法化して読んだらダメです、これは全部福音だから。力と光と生命と愛が裏付けをもつて語っている言だから。

「この意味はどうだ」

なんて、しょつちゅう意味を詮索している。冗談じゃない、そんな読み方をしたら、くたびれてしまうよ。むしろ、パウロ、ペテロの言のもう一つ奥を把むくらいのことで読む。

「儀文は殺し、靈は生かす」

という。パウロはそこでちゃんと言っている。

3 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。4 これ肉に従わず、靈に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。

旧約の世界の「律法の義」を全うするというよりも、むしろそれを乗り越えてしまう。キリストも、

「律法・預言者を全うせんが為に来た」

と言っておられた。成就せんがために来たと。キリストの気持は、

「そんなもの乗り越えた、もつと素晴らしいものを与えるために来た」というくらいの気持なんです。



## ●言の奥の響き

「肉」というのは、自己本位なこと。

「自己本位な歩き方をしないで、霊に、聖霊に従って歩む私たちのうちに律法の義の全うせられんためなり」

と。これは充分全うされてしまう。

5 肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。

「肉にしたがう」というのは自己本位な在り方のこと。神・キリスト本位の在り方が「霊に従う」ということです。だから、

6 肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。

その通り。パウロの「霊・肉」というのは、いろいろな場合がありますけれども、一番深い意味では、「霊」というときには、神・キリスト本位の聖霊の世界です。「肉」というのは、神・キリストぬきの自己本位のことです。信仰なんていったって、神・キリストを利用してするような信仰はなおさら悪い。「霊の念」といつても、ただ思うことではない。

「霊の中にいることは本当に平安である」

ということです。

パウロであろうとペテロであろうと、その言の奥をグツとつかんでしまう。キリストの光がそうさせる。皆さん、これを読んでいて、力がこなかったら、光がこなかったら、生命が来なかったら、本当に読んでいるということではない。聖書というものは言葉の世界ではない。響きの世界だ。

## ●聖霊人

7 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、8

また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。9 然れど神の御霊なんじら

の中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん。キリストの御霊なき者は

キリストに属する者にあらず。

「神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん、

ではない。

「神の御霊なんじらの中に宿り給うが故に、汝は肉に居らで霊に居るなり」

と、はつきり、現在の直説法で読んでいった方がいい。

「キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず」

全くその通り。だから、我々は聖霊人です。もちろん十字架が土台になっています。何も、人に言う必要はない。自分の魂の奥でその自覚をもつことが大事です。

議論をする必要はひとつもない。在り方をもって示していくことが本当の言葉です。キリストの在り方が即ち「神の言」という。要するに、表現体です。これが証人です。キリ



ストを証しすることが同時に神讚美です。存在そのものが神讚美、神讚美の姿というものはいいものだ。

一遍上人の世界が自己を捨ててかかった捨聖すてひじりの世界です。聴いている人が楽しくなって、踊りだしたという。一遍とか一休というのは凄い。禅宗のしんがりをやった一休、浄土真宗のしんがりをやった一遍、この二人が一番すごい。私たちは、語るも聴くも同じこと、今日は本当に聖霊人にされて、神讚美、キリスト讚美となった。これが私たちの心の相すがたです。人生の目的は神讚美です。何も皆で

「ワッショイ、ワッショイ」

と踊る必要はないけれども、姿が、心が、魂が讚美で踊っているわけだ。いろいろな事のでつくわしても、そんな事は乗り越えて、神讚美です。どんなひどい目に遇っても神讚美です。

今日はとても楽しい。大いに讚美歌を歌いたい。パウロは牢屋の中にも、ペテロもそうだけれども、本当に神讚美してた。鎖が抜けたりする。キリストにある聖霊の現実というものは

「これでいい」

なんていう所はないですから、いよいよそのようにして進んで行きましょう。

